『この子供たち』(7)

イーディス・ウォートン作
松原至大訳

ボインとその愛人

クリフ・ホキータが、リボンの上に「ファンシー・ガール」と書いた、小さなヨット帽をかぶったチップを抱いて、デッキを歩いている姿は、幸福な父親の見本とも見えた。ホキータは、ボインにほかとの約束をことわらせて、アドリア海を、コーフとアゼンスまでも行こうじゃないかと、無理強いに誘った。ボインは、日あたりのよいところに腰をおろして、子供たちの笑い声にとりまかれながら、自分の椅子のひじに、ジュディスをよりかからせていた。自分はなぜこの招きに応じないのかと、自らに問うた。これ以上の、よい人生はないではないかと思った。伯父のエドワードだったら、きっと承知したであろうと思った。この時、そばの主人公はデッキ・テーブルの上のカクテルを新しくつぎながら、

「面白い連中に紹介するぜ、君。チャンスをとらえるものは、たれだって成功するよ。なあ、ジュディス、ボイン君に娘さんを探してあげるかな。」

「この娘さんでたくさん。」ボインはこういって、ジュディスの手をとって笑った。うれしさの赤らみが、ジュディスの顔に見えた。

「まあ、マーティンさん——もし、あなたが——まあ、そんな。」

ジュディスが、こうはいったが、ボインは言いたいことをこらえてしまった。ボインはジュディスに、お別れの贈物をしたいと思った。高価なものでなくともよいが、レンチ夫人から与えられた失望を、つぐなうことのできるほどの、なにか小さなものを。あの時、ジュディスが、正直に失望を見せたことは、ボインを驚かせたのであった。しかしジュディスも、子供にすぎない。世間一般の娘から切りはなして、考えることは、かわいそうだと思いなおしていたのである。結局あれこれと探している時がなくて、マーセリアで、ありふれた装身具を求めて、別れぎわに、そっと手渡した。ジュディスは、とても喜んだ。

ボインは、ひとりきたない汽車にゆられながら、なぜもっとヴェニスにいなかったのかと、自分で自分に聞いていた。それには、二、三の理由があった。その理由の一つは、数カ月前に、ボインは、ドロマイツのローズ・セラーズと会う約束がしてあった。時計と良心を忘れてしまったような今日の時代にも、ボインは時間正しく、良心を持っていた。ヴェニスと、新しく親しみを持った友だちとに、別れ難い思いを抱いたことは、自分の感じている愛情が二つにされたこととなる。だが、ボインは節をまげることだけは、許すことのできない時代に属する男である。一度自分の必要をみたすかに思えた婦人は、永久にそうであると信ずる道徳的な支持を望んだ。セラーズは、ホキータ夫妻や、その一族のものに比べると、いかにも自分に近い世界の人間であった。だからこの二つのものの間を、さまようなどということは、想像だにつかないことである。ローズ・セラーズは、ボインにとって、いつも目あてになる北極星であった。

「なんだ、ばかばかしい。両方を一緒につかむことはできないぞ。」自分で自分をしかってみた。

あれから、まだやっと四十八時間しかたっていないのか。今こうして、クリスタロ群峰の雄大な、銀と真紅の山腹をながめて、山荘のバルコニーに腰をおろしていると、ボインは、自分が考えていたいろいろなことは、峰のかなたの青空に消えて行く、霧のように思えた。ただ、空気が変ったからであろうか。それとも銀のラッパを吹きならすような、この清浄なエーテルの中に、突然はいったからであろうか。一部分は、そうであろう。おそらく――そして大部分は、ボインが心の中でひとり、死んでしまったのだと思っていた人生が、ふしぎにもよみがえって来たためである。

「ほんとうに、お気に召しまして。」と、セラーズが聞いた。ここに来て、初めての朝、樅の香のするバルコニーの上に腰をおろして、谷の向うの絶壁が、ほのほ色から、だんだんに灰色にかわって行くのをながめた時である。

「いかにも、あなたにふさわしいのが、なによりも気に入りましたよ。」と、ボインは答えた。

「私は、あなたが、ヴェニスと、お金持ちとを後にして、ここに来て下さったのが、うれしゅうございます。それは、この山のためにありがたいことですわ——そして私のためにも。」

かれ等自身についての、直接な会話は、それで終った。後は、記憶や、質問や、思い出などの糸をたぐって、離れ離れであった二人の五年間を、物語でゆっくりと築きあげた。

おなつかしいマーティンさま

ここは、よいところです。そして暖かです。私たちは、リドーで、海水浴をしました。ヨットにものりました。ボンデルモントの奥さんの、ライオン使いはなくなりました。そしてあの人はお金持ちのアメリカ娘と結婚しました。それでビーチーとバンは、ジニーがおかあさんからもらったような、またブランカが、私からとってしまったようなお土産を、たくさん貰えるものと思って、とてもはしやいでいます。でも私は、マーティンさんが下さったのが、一番好きです。なぜかといいますと、それは、あなたが下さった上に、またとないものですから。ボンデルモントさんは、お金持ちになったので、バンを連れにきはしないかと、私は心配しています。もしバンが連れて行かれると、ビーチーは、死んでしまうでしょう。ですから、私は、スコープの御本を借りてきて、どんなことがあっても行かないと、バンに誓わせました。

母と父が、大げんかをしました。母がジニアさんとレンチさんを、ヨットに招待しようとしましたら、父が下品なことだといいました。母が、それならば、なぜ私がよしましょうといった時に、あなたは気にしたのですかといったことからです。母は、あの人たちいっしょにいる、メンディップ公爵と、ちかづきになりたいのです。それからジニアさんが、毎日ジェラルドさんをおひるの食事に呼んでいることが、母のしやくにさわったのです。こんなことをいってはいけないと、あなたはおっしゃるかもしれませんが、おなつかしいマーティンさん。もしジェラルドさんのことで、父と母との間に争いがおこっ

て、テリーが先生をなくすることにでもなりましたら、私はどうしたらよいのでしょうか。私は、早く子供たちを連れて、こゝを出発したいと思います。テリーは、私がスペルをまちがえるといけないから、見せてくれと申しましたが、出すのをとめるといけませんから、見せませんでした。

マーティンさん、お願いですから、あなたから父にお手紙を下さって、早く私たちが出発のできるようにして下さいませ。テリーの熱が出てきましたし、なにもかも、私は心配になってたまりません。あなたがこゝにいて下さったらどんなによかったでしょう。みんなが、あなたのおっしゃる通りにするでしょうから。

お慕いする　ジュディスより

追伸、私がお手紙をさし上げたことは、どうぞホキータのものに、おっしゃらないで下さい。

この手紙を読み終えて、まづボインが思ったことは、バルコニーでの、あの晩の出来ごとの後でよかったということであった。出来ごとというのは、今まで永い間の沈黙のために、できていた障壁がとりのぞかれて、ローズ・セラーズを、ボインが腕の中に抱いたということであった。それは深い、そして静かな渕の、澄みきった水面のような抱擁であった。セラーズは、ものをいわなかった。ボインは、それを神に感謝した。二人の静かな結合は、沈黙の中に、美しい花を開いた。セラーズは急ぎもせず。またためらいもしなかった。完全な黙諾によって、お互の心の奥底にあったものが、手と唇とを通して、通じあったのである。

「今ならば、楽々とセラーズに相談することができる——かの女もよく理解してくれるであろう。」なにとはなしにボインはこう思った。つい昨日までは、セラーズはホキータ家の問題を、どう思うであろうか。またかの女は、ホキータ家のたれとも、またその世界について、どのような共通点を持っているであろうか、などと、ボインは不安に思っていたのである。けれども今の二人は、一体なので、ボインの重荷は、当然セラーズがわけ持たなければならない。

ジュディス・ホキータからの手紙は、もう一週間の余も、ポケットの中にはいったまゝで、ボインがとり出した時は、しわ

くちゃになっていた。ボインとセラーズは、岩の赤い出張りのところによりそって、松に覆われた絶壁や、牧場や、林が青いドロマイツの果てしないかなたに、連なっているのを見下していた。

セラーズは、時々眉をよせて、ジュディスのちがつたスペルを判読しながら、熟心に読んだ。

「ジェラルドとおっしやる方は。」

「テリーの家庭教師ですよ。ぼくは、この男もいやな奴だと思っています。だが、テリーという子は、よい子ですよ。この子と、ジュディスと、スコープとは、どんなことがおこっても、間ちがいなく、やって行くと思うんです。ただテリーの身体さえ、健康が続けば。」

「ホィータ御夫婦は、子供さんのことを、少しもかまわないのでしょうか。」セラーズの目には途方にくれたような、悲しみがいっぱいであった。

「気にはかけていますよ。子供たちといっしよにいる時は、たしかに好きなのですよ。だが、好きなのと、世話をすることとはちがう。ぼくの見るところでは、ずっと以前から、自分たちに世話をする能力のないことは、知っていたらしい。だからそうしたことは、全部ジュディスにまかせていたという訳でしょうな。」

「ずっと前から。でも、ジュディスさんは、おいくつかしら。この筆蹟は、十ぐらいの子供のですわ。」

「学問をする時が、なかったのですよ。六人の子供の世話をするので。十五か、六にはなりましょう。」

「十五か、六。私の娘としても、若いくらいですわ。」セラーズは、ため息をついた。

「あなたの子供だったら。」ボインは、危く口に出すところであった。その代りに、手をさし出して、手紙をとりあげた。この様子が、セラーズを、問題の実際的方向にむかわせた。

「あなたは、どうなさろうとお思いになりまして。」

「それは、ぼくが、あなたに聞きたいと思ってることなのです。」ボインは、セラーズに相談して、よかったと思った。

「あなたは、そのお子のおとうさまに、お手紙をあげなければ。」

「しかし、出しやばるようでね。」

「いいじゃございませんか。お子さんたちを、あまり長くヴェニスにおいとくことは、よくないということを申し上げるのですよ。そこの気候は、その男のお子に、いけないことは、おとうさまも御存じだと、あなたはおっしゃっていらっしやいましたわねえ。」

「いかにも。それには、ホキータ君も、すぐに賛成しますよ。言葉の上だけでは。そしてこういうでしょう。『だめじやないか、ジョイス。ボイン君のいう通りだ。子供たちは、ここでなにをしているんだ。一まとめにして、明日、エンガディーンへ出発させよう。』とね。それから、あの男は、ぼくの手紙をポケットにつっこんで、二度と見やしませんよ。自分でコートに、ブラシでもかけなければ。」

「でも、おかあさまが——ジョイスさんと申しましたね。その方に、御主人がお話なされば——」

「ええ、そこが面倒なのですよ。」

「どうして。」

「そのおかあさんが、ジェラルドのいるために、子供たちをヴェニスにおいときたいとでも思っていたら。」

「家師教師の方。まあ、マーティン——それでも、その方、自分のお子を愛しているとおっしやるの。」憎悪のふるえが、セラーズの身体を走った。

「そうです。とても、かわいがりはしています。だが、いろんなことが一つの渦になって、あの女のまわりを、とりまいているのです。こういう人にとっては、人生というものは、始終回転しているフィルムなのです。あなたが見物席から出て行って、フィルムの流れをかえようとすることはできない。」

「では、あなた、どうなさるおつもり。」

ボインは、草の上に寝ころんで、顔をしかめながら、空を見た。

「考えがうかばない。ぼくが、一日、二日、ヴェニスへよって、あの人たちに、直接話してみるより外ありません。手紙な

どでは役にたちませんよ。」

セラーズは、ボインのかたわらに、きちんとすわっていた。その目は、少しくもってボインをのぞきこんでいた。

「ヴェニスへお帰りになる。」セラーズの声の中に、ボインは、反抗のやいばを感じた。「そうなさっても、なんの益もありませんわ。二度もあなたに、いやな旅行をして頂くなんて、私、たくさん。それに、手紙に書きようがないとおっしゃるのなら、口で表しようもありはしません。」

「いいようはないかもしれません。でも、とにかく、なんとかなりましょう。ジュディスを、少しでも慰めてやれるでしょう。」

「かわいそうなお子。そうしてあげられれば。でも、まづお手紙をあげた方がよいと思いますの。そのお子にも。どっちにしても、大体の見当をおつけになってから、なさる方がよろしゅうございます。家庭のいざこざに、口をお出しになるのは、いつでも気まづいものですから。」セラーズの調子は、もとのやさしさにもどっていた。

「なるほど。」と、ボインは相づちをうって、パイプをポケットにしまいながら、立ちあがった。折角の休みが、他人の家庭のいざこざで、だいなしにされようとは、思いもつかなかった。腹立たしそうに、ジュディスの手紙を、ポケットに押しこんだ。結局、自分に、なんの関係があるのか。だが、あの子には、手紙を書いてやろう。セラーズのいったことは、正しかった――ヴェニスへ行くということは、ばかげたことだ。しかも、ジュディスの手紙がきてから、もう一週間の余になる。おそらく今ごろは、あの一行は散り散りになって、子供たちは、どこかの山地で、安全に暮しているかも知れない。

「かわいそうに、あの娘は、いつも過労だ。多分、あの手紙を書いた時も、なにか心配ごとがあったのだろう。ああ、面倒だ。手紙なぞよこさなければ、よかったのに。」ボインは、よくも遠いところの問題を、こんなにも気に病んだものだと思った。そしてセラーズと、腕と腕を組みあって、山を下った。（つづく）